

平成 25 年度 第 3 回狩猟鳥獣のモニタリングのあり方検討会（鳥類）
議事概要

日時：平成 26 年 1 月 23 日（木）14:00-17:00

場所：（一財）自然環境研究センター 7 階会議室

議事（1）. ヤマシギのモニタリング手法について

非繁殖期の調査結果について

- ・ 調査結果には、調査日の天候や風などの状況が重要なファクターとなる可能性があるため環境データを記述すべき。月に一回ずつ調査をしているが、同じ場所で複数回（最低 3 回くらい）調査を繰り返し、確認個体数のバラツキや鳥の動き（定住性）なども考慮すべきと考える。また、観察に有効は範囲（距離）があると思うので、観察者から鳥までの距離についても記載した方が良い。（尾崎）

50mより遠く離れると識別は困難であった。（事務局：中島）

- ・ 調査の時間帯が日の入りから 24 時までと幅があるが、時間帯によってヤマシギの位置が移動している可能性もある。最適な調査時間帯の絞り込みを検討してみてもどうか。今回は開けたところばかりで調査しているが、場所についても先入観にとらわれず森林環境などでも調査を試みるべきなのは。（川路）

千葉県旭市では谷戸環境でも調査はしているが、今回は見つからなかった。（事務局：中島）

- ・ 今回試行調査の目的は最適な調査時期の選定であったが、生息環境としてヤマシギがいた場所の植生等の情報も収集しておくべきと考える。（橘）
- ・ 11 月と 12 月の比較であったが、1 月や 2 月に調査していない。12 月がベストかわからない。観察数が減少していくのがいつかを確認すべき。（尾崎・川路）

日本海側だと雪の影響もあり調査が難しいのではということで、12 月までにしている。千葉では 1 月に調査を実施しているが 12 月の方が成績はよかった（11 月 0 羽、12 月 2 羽、1 月 1 羽）。（事務局：安齊）

- ・ 今回調査地がヤマシギの狩猟捕獲数が多い場所なのに、生息調査では見つか

らなかったということであれば、ライトセンサスよりも猟犬を使った調査手法の方が良いという可能性もある。狩猟者からの聞き取りなどで、確認したほうがよいのでは。(川路)

繁殖期における調査提案について

- ・ フランスでのモニタリング事例では、調査地点が 1000 か所ととても多い。そのくらい多ければいろいろなことが言えるのは確かだと思う。もし日本でも同じようなモニタリングを考えているならば、何か所くらいで調査すれば有意なデータになるのかを検証して、誰が調査するかを考える必要があるだろう。広く地点数を多くして調査すれば、一つ一つの精度が低くてもいいのかもしれないが、逆に地点数を少なくして非常に高い精度の調査を行うということも考えられる。(尾崎)

フランスでの調査手法は日本にそのまま使えないと考えており、繁殖期の調査手法の確立は大変なのではないかと思っている。ただ、越冬期は良いデータがとれていると思うので、当面越冬期の調査だけでも生息動向をつかめるのではとも考えている。そのあたりについてご意見がほしい。(環境省：松尾)

繁殖期と越冬期はそれぞれ調査手法があった方がいいと思う。ただし、マニュアルは必ずしもセットでなければならないとは思わない。(川路)

繁殖期と非繁殖期が揃えば、理想的だと思う。しかし、非繁殖期のほうだけでも、精度があがって、進められるのであればそれでも十分で、大事にすべきなのではないか。(橋)

- ・ フランスで実施されている手法をそのまま用いることは難しいだろう。ただ、日本では、ほとんどヤマシギの研究なんてされておらず、一からやるのであればそういった知見を利用できるものは利用したほうがいいと思うので、どこが利用できて、どこが利用できないかということ検討すべきと考える。(川路)
- ・ 繁殖期のヤマシギには渡ってきた時の集結地があると考えられる。明確な集結地があるなら、その場所での変動を調査することも有効かもしれない。(川路)

議事(2). ウズラのモニタリング手法について

非繁殖期の調査結果について

- ・ タシギやキジを撃つ猟師からウズラの情報を収集してはどうか。今までは狩

獵のデータとしてウズラの捕獲数が出ていたけど、これからは目撃データ、いわゆる出合数調査のような形で収集できる可能性があるのではないか。
(川路)

キジ撃ちの人に聞くのはいいと思う。判別を間違えることもないだろう。(事務局：中山)

マニュアルについて

- 全部「ですます調」に統一する。P23、非繁殖期の最適な方法として「～は唯一の方法」は言い過ぎなので、「最適な方法」などと言い方を変えるべき。非繁殖期の調査では、モニタリング調査であることを強調して、ウズラを探して調査場所を変えるのではなく、同じところを複数年続けて調査続けるといった記載をすべき。(川路)
- 調査時期について、本文と表の書き方が違うので修正。ルートセンサス調査票について、ウズラは枝にとまるはないので、パーチの項目はいらぬ。P8の真ん中の地図、愛知県が茨城県のままになっている。(尾崎)
- このマニュアルを作って、誰が使うか。これを作って、やってくださいと言うのか。どの機関が固定して実施するのか。どんな風に使うのか。(橘)
イメージだが、まずは分布情報を広く集めたいのが第一歩。その際、このマニュアルをつかえばいいツールになるのではと思っているが、誰がやるかという幅広くやってほしいので、獵友会とか野鳥の会などにもお願いしていきたいと考えている。収集方法として、一例として生物多様性センターが開始した「いきものログ」(広く生物の生息情報を集める)の活用をイメージしている。(環境省：松尾)
- 一般的な生息情報を集める話と、モニタリングをきちっとしていこうと言う話は別。一昨年から実施してきた試行調査のように定期的に同じ時期に同じよう実施していくやり方は非常にオーソドックスであり、すぐにモニタリングは可能と考えていた。特定の場所を定めて、毎年、データを積み上げていき、それで増減を見ることは、環境省で実施していくのか。(橘)
全国的な動向をモニタリングしていきたいと考えているが、現状でどこに生息しているのか、情報が非常に少ない。そこで、生息情報を集めつつ、繁殖地が限られている繁殖期の調査は、並行して実施していくことを考えている。非繁殖期も実施するが、県とかにも少し働きかけていきたい。(環境省：堀内)

- ・ 「いきものログ」はやらないよりはやったほうがいいのかもしいないが、モニタリングとは全然違う。調査マニュアルは詳細に作っているのに、定期的に行っていくものと思っているが、調査実施者が誰かによって、多少中身をたし引きする部分あると思う。(尾崎)

議事(3). キジ・ヤマドリ出合数調査手法について

ヒアリング調査結果について

- ・ 福井県では雪が降らないとヤマドリを撃たないということであるが、出合数も少ないのか。(川路)
 - 調査員数も少ないが、出合数も少ない。(事務局：中島)
- ・ 鹿児島県は何を撃ちにいった人がヤマドリを見ているのか非常に気になる。また、ここ数年の出合数を見るとオスとメスがきれいに相関しすぎており疑問。目立つオスの方が出合数は多くなるはずである。(川路)

議事(4). その他

既存調査データの活用について

- タシギについて
 - ・ 毎年同じ場所で調査しているのでモニタリングにはなると思うが、シギ・チドリをカウントする環境では必ずしもタシギの生息に好適ではない。このため、この既存調査での確認数は生息数のごく一部と考えられ、サンプリング数としてはかなり少ないかなと思う。(尾崎)
- バンについて
 - ・ モニタリングサイト 1000 のガンカモ調査サイトからの情報ということで、シギチ、ガンカモもサイト数が確保されていて、これこそモニタリングであり、かなり充実していると思う。その中で、バンの情報を得ることが出来るようになれば更によいが、今の状態でもかなり活用できるのではないか。(橘)
 - もともと湖沼の生態系調査を目的として、ガン、カモ、ハクチョウ類等を対象として、代表的な場所をサイトに選定している。調査目的としては100年単位でのモニタリングを考えており、これからバンに特化した調査を実施していくことは予算的にも難しいだろう。(木村)
 - ・ バンの確認数が少ない理由としては、調査時は水面に浮かぶカモ類に目が行って、茂みやその他の場所への注力が低いことも考えられる。あと、生息数

が多いと思われる沖縄にサイトがないことも一因か。(尾崎)

調査は各季節(春、秋、冬)で1回以上という設定。ガンカモ類が多い場所・時期でやるようお願いしている。バンはあまり着目されていないので、確認数にはばらつきがでてしまうことはあり得ると思う。(木村)

バンに注目してくださいとお願いすれば、モニ 1000 のデータも十分活用できるのではないか。(川路)

バンはガンカモ調査の対象種に明確に含まれている。今後もずっと続いていく調査なので、もう少しこういうところに気をつければ、といったアナウンスを加えていければと思う。(環境省：松尾)

- ・ 福島潟では 2011 年度からバンの確認数が激減している。一方、他の地域では増加している。増減が地域ごとに違っていたり、同じ所で調査しても調査者の状況等でも条件が違ったりすることが考えられるため、扱いは気をつける必要がある。同じ場所でも実施していても、いろいろと条件があるので絞り込みができれば良い。(川路)
- ・ 報告数が少ないのは、調査者による違いが大きいのではないか。基本的に水面にいることが少ない鳥なので、水面以外の場所など、まわりを見る人と見ない人の違いで調査結果に違いが出てくると考えられる。(尾崎)
現状としては、利用できそうな既存調査があるので、大きな動向を見るための調査として利用していきたい。今後急に動向に変化があれば、何らかの対処は必要とは考えている。(環境省：松尾)
- ・ 近年は、水鳥対象の野鳥観察舎みたいなものが各地にあって、種別に場所によっては数などもデータとして取っている場所がある。そういう所は割と見る人が安定しているので、参考になるのではないか。(尾崎)

その他全体について

➤ 出合数調査

- ・ キジ・ヤマドリ動向について、今年度はこの出合数調査で何とか活用しようということか。今の方法ではどうしようもないので、新たな手法を考えようとは思っていないのか。(川路)
何とか活用できればと考えている。そのためにどう改良すればよいかご意見を伺いたい。(環境省：松尾)
- ・ 福井は出合数調査自体が成り立っていない状況ということがわかった。これ

はこれでよかったと思う。(川路)

- ・ 初猟日とその後のデータを集めることができ、検証ができれば、初猟日が調査適期であるのかがわかるのでは。(尾崎)
- ・ 初猟日とするのではなく、初めて猟に入った日としたらよりデータが集まるのではないか。(川路)
- ・ 私の調査経験から参考までに。自分もラインセンサスや車でのセンサスをしているが、春はオスのほうが多く、秋はメスが多い。この結果と同じような傾向があるとするならば、オスの方が多くなっている出合数調査結果には違和感を覚える。(川路)
- ・ 調査手法としては、みんなが正しく判定できる方法であり、普遍的に後から検証できる方法が良い。車でのセンサス調査を行う場合、発見率はルートセンサスの半分くらいになるため補正が必要かもしれないが、一番取り組みやすい方法と考えている。(川路)